

一 昭々坦々淨邦に通ず

私わたくしは私わたくしの家に歸かへるのであります。私わたくしの家は親おやの家いへでありまして、同どう時に私わたくしの家いへであります。他人たにんの家いへに行くゆのならば、遠慮えんりよもいりません、氣兼きがねもいりません。今行いまつては如何どうであらうか、果はたして行いかれるであらうかと、氣遣づかひもすれば、氣苦勞きくらくもします。豫あらかじめ様子やうすを伺うかつて置おかねばならぬ必要ひつえうもあります。が、我家わがやに歸かへるには、何なんの心配しんぱいもいりませぬ。いつ何時なんどきの躊躇ためちひなく、ずかくと這入はいつて行いかれます。諸佛菩薩しよぶつぼさつの淨土じやうどならば、歸かへらして下くださいと願ねがひ祈いのる必要ひつえうもありませんが、彌陀みだの親御おやごの本國ほんごくに歸かへるには、親おやの實意じついにまかせて、歸かへらうと云いふ氣きの起おこる、それが求道きうだうであります。起おこるは私わたくしの心こころだが、起おこして下くださる力ちからは、蔭かげに親御おやごの念力ねんりきが働はたらいて居あるのです。「設たとひ世界せ界かいに滿みてらん火ひをも、必かならず過すぎて要もとめて法のりを聞きけ」と云いふ。親おやの本國ほんごくに歸かへるには、何物なにものをも打措うちおいて、四圍あま一切さいに顧慮こりよするなく、サツサと進すすみ行ゆけとの意いであります。御親みおやは常つねに喚よんで下くださる。互たがひの間の墻壁せうへきを去きつて、親おや子こ一體たい佛ぶつ凡ぼん一體たい。大道だいだうは昭々坦々せうくたんくとして淨土じやうどの都みやこに通つうず。上あげよ重おもき尻しりを、立たてよ弱よわい腰こしを。沈痛ちんつうなる自己じこ發見はつけんによつて、自己じこの眞價しんかと尊嚴そんげんとを感かんじ來きたる時とき、心こころを弘誓くげいの佛地ぶつちに樹たて、念おもひを難思なんじの法海ほふかいに流ながさざるを得えないでないか。

けれども、我等われらが此この世よに於おける生活せいくわつは、獨ひとり暮くらしである。とはいへ、一面賑めんやかな親おや付きである。佛ほとけの力ちからは絶たえず私わたくしに加くはへられ、我わが血ちに佛ほとけの血ちは通かよひ、我わが肺はいに佛ぶつの息いきを吸すうてるのであります。靜しづかに此世このよの一面めんだけ眺ながめてみれば、實じつに一人一人にんのしののぎである。「後生ごしやうこそ一人一人ひとりののしののぎなり」とは蓮れん如上人にょしやうにんの仰あかせなれども、後生ごしやうまでは待まちたで、今生こんじやうこそ一人一人ひとりののしののぎなれ。今生こんじやうが既すでに一人一人ひとりののしののぎなればこそ、後生ごしやうが一人一人ひとりののしののぎであり、同時どうじに亦前生またぜんじやうが一人一人ひとりののしののぎであつたのであります。近い所ちか此世このよに於おて、一人一人ひとりののしののぎが自分じぶん々々くの世界せかい

を持つて、自分々々の世界に住んでゐるのである。大雑把に大勢が、一緒にたに、同じ道と同じ様に、ガヤ／＼と進んで行くのではない。實に一人々々が、自分々々の道を、自分々々が歩んで行くのであります。

「同病相憐む」といふ。病氣の苦しきは、病人か又は病氣した人でなくては解らない。それも只病氣といふだけでなく。頭痛持の辛さは、腹痛の人に解らず、脚痛の困り方は、齒痛の人に解らぬ。矢張り同じ質の病氣の人でなくては、其の味が解らぬだけ、それだけ、相憐むと云ふことも出来ない。子供を死なした淋しさ悲しさは、實際子に離れた人でなくては知られぬ。夫に先立たれた手頼なさ不安さは、眞實夫に後れた人でなくては想像だに及ばぬ。とはいへ、いよ／＼の處になると、夫れ／＼皆別々でありまして、眞底から之を知り抜くことは出来ませぬ。その氣質に因り、體質に因り、境遇に因りて、受くる所の感じは、悉く別異でありますから、何處までも、人は獨り／＼で、自分の世界に住まねばなりません。従つて、眞實に自己を知る者は自己である。

或る事件について、他人に相談を持ち掛けて見る。「好からう、さうであらう」位のことです。「やつて見たまへ」と云ふが關の山だ。半分は決めて呉れても、あとの半分は自分が決めねばならぬ。よし親友とか兄弟とか親とかで、七八分、思切つて九分九厘まで、定めて呉れた所で、残りの三分二分乃至一厘は、自分で定めねばならぬ。たとひそれが命令的に全部を決定して来たかとして、最後の實行者は自分である。人の食うた御飯では、自分の腹は脹れぬ。自分の空腹を癒すには是非とも自分で掻込まねばなりません。この意味に於て、自分の世界は自分の創造である。自分の外に創造者もなければ、製作者もありませぬ。

然り。私は私の世界を創造しつゝあるのである。燈火は自分で光を放つて、自分の光の眞中に住んでゐる。而もその光は、刻々に放つて、刻々に進み行くのであります。私の周囲を包む山も川も、雲の去來も、風の動靜も、人々互に共通のやうに見えても、實の所、共通なるものは、一つもありはせぬ。私は私の天地に迎へ入れられたものでもなければ、境遇に呼込まれたものでもない。世界の創造者造物主は、實にこの私なのである。私が創造するのである。向ふにあつて私を待つのではない、私が勝手に建設し、隨意に製作するのである。佛語を以て云へば、自己以外のものは、すべて自己の依報である。而もこの依報は、主體たる自己即ち正報そのものゝ、表現に外ならない。かくて私は私の世界の主人であります。

昔者、唐の李文公、一日、藥山惟儼禪師を訪れ「如何なるか是れ、惡風船を吹いて鬼國に漂着す」。惡い風が吹いて鬼の國へ、船を流し落とすとか云ふこととで御座いますが、これは一體どうした譯でしやうと、質問いたした。時に藥山呵々大笑して、「李翱小子、之を問ふ、何の爲ぞ」。李翱貴様の如き子倅が、そんな事を聞いて何にする。鼻であしらひ、顎で嘲つてゐる。李文公とまで尊敬せられて居る人が、小兒扱ひにせられては、胸穩かなるを得ない。腹の底の虫がムクムクと動き出して、怒りの様子が顔に顯はれた。禪師すかさず。「あゝお怒りですか。その瞋恚こそ、所謂惡風船を吹いて鬼の國へ流すので御座る」とやられたので、李文公グウの音もあがらなかつたが、成程と痛く感心せられたさうです。その感心が、今度善風船を吹いて佛國へ渡すのでありませう。